

視線

ソーシャルインクルージョンを考える

実情
situation

Point of View

PROFILE

塚本 景都^{つかもと けいと}さん (阿知ヶ谷)
先天性の二分脊椎症^{にぶんせきつういししょう}と水頭症^{すいとうししょう}により、下半身と脳の機能に障害を持つ。
美声を生かした音楽活動を続けながら、今年4月から島田市役所に勤務。

「普通」の意味を問う

性別・年齢・経歴・障害・病気に関わらず、誰もが互いに包み支え、全員が活躍できる社会づくりが「社会的包摂」の理念。

近

年わが国では、少子高齢化や都市化などにより家庭環境や社会環境が大きく変化し、「個」の価値観や「他」との関係性が多様化している。情報の氾濫や干渉の敬遠は、人と人との繋がりを希薄にし、他人への無関心は貧困や格差、自殺やDVなどの問題を生んでいる。福祉ニーズも多様化し、従来の対象だった障害者・高齢者・困窮者・子どもなど「特定の人」に加え、そうした問題を複合的に抱える、特定の人「以外の人」も支援を必要としている。

国が目指す「一億総活躍社会」の実現は可能なのか。9月に内閣府が公表した「障害者に関する世論調査」では、国民の8割以上が「世の中には障害のある人に対して差別や偏見がある」と思っていることが明らかになった。一方で、差別は「ないと思う」と認識している人は14・2%。問題を把握しながらも、困難な状況は他人事であり、それを抱える人に対する関心が低い実情がうかがえる。社会的包摂とは、互いに認め合い、地域や制度とつながる関心。「普通」という言葉を持つ尺度の改革で、その理念を広める人々を追った。

仲間
member

Red Point Brothers

外見で揺らぐ「普通」
あるがままの個性を表現できれば、誰もが
あらゆる場で活躍できる。全員参加型
の社会を阻むのは、見えない「色眼鏡」。

PROFILE

レッドポイントブラザーズ
島田市を中心に活動するフォー
クソング・バンド。略してRPB
(赤点兄弟)。左から牧野侯夫
さん、鈴木紅介さん、森下修
さん、杉浦由明さん。



自身も障害者であった英国の人
権活動家ステラ・ヤング氏は、
活躍する障害者に対して抱く健常者
の感情を「感動ポルノ」と表現した。
病気や障害は負であるから、それを
抱えて生きることは素晴らしい。健
常者は障害者の努力を目の当たりに
すると、感動を上乘せしてしまう社
会的傾向を、彼女は指摘した。

自分では気付きにくい「違い」への
偏見や先入観。感動という言葉は、
都合よく差別や区別とすり替えられ
ると、問題を見えにくくしてしまう。
障害や病気は、個人を代表する出来
事ではない。困難や不自由よりも、
そうした社会の歪んだ視線が、活躍
する障害者の輝きを鈍らす。

障害者が健常者と同じ条件で普通
に生活できるよう、日常の壁を取り
除く理念「ノーマライゼーション」。
これまで、共生社会の実現に向けた
議論の中で、提唱され続けてきた。
しかし「普通」が、健常者からの視点
であってはならない。必要なのは、
当事者を社会に適合させる正常化で
はなく、社会が適応して当事者をあ
りのまま受け入れる平常化だ。

誰もが、障害を持って生きていく。
それを人生の始まりと同時に抱える
か、途中で事故や病気により抱える
か、それとも終盤に老いて抱えるか。
違いは、当事者になるタイミングだ
け。「かわいそう」という色眼鏡を外
さなければ、人生で輝く機会を自己
共に逸してしまうことになる。



とにかく良いものは良い

interview

放課後、デイサービスの施設で景都ちゃんの歌声を聴いた時、僕らRPBと一緒にライブをやってほしいと、すぐに思ったよ。それが、福祉の場などでのライブ活動の始まり。

合唱の経験があるから、フォークの歌い方とは違うけど、擦れてない高音が素晴らしいね。発声に細かい指示を出すこともあるのは、仲間だからこそ。彼女も苦勞を喜びに替えてくれているんじゃないかな。

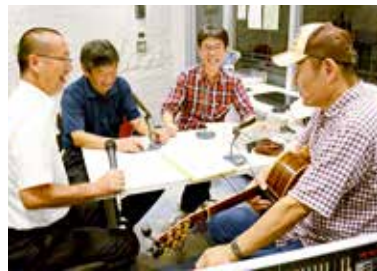
障害があるからって、彼女の歌声を過大評価することは無い。良いものは良い。その見方は、出会った時から何も変わっていないし、楽しい仲間が増えたという気持ちのまま。年齢や性別、立場や障害を問わない「特別扱いしないこと」が、お互いに気楽ながらも信頼できる関係で、活動を続けられている秘訣だね。

最近「生音」を聴いたことがない子どもが増えているように感じる。景都ちゃんの歌には、そういった場所でも、感動を広げて笑顔を増やす力があるから、もっと披露する機会を増やせばと思う。

彼女は、歌い手としても成長の過渡期。経験を重ねるごとに詞の意味をより深く理解していくだろうから、さらに上手な表現者になっていくはず。こちらの加齢が、演奏を難しくするのは裏腹にね。



(左) 和やかな雰囲気の中で行う、ライブに向けたリハーサル。(下) FM 島田で放送中の「レッドポイントブラザーズのフォークヴィレッジ」の収録風景。



番組内容はQRコードから。毎週火曜日午後3時から放送(再放送は金曜日午後9時)。

voice



つかもと ひろみ
塚本 博美さん(阿知ヶ谷)
景都さんの母。董塾店主

景都は幼い頃から、何でも歌でコミュニケーションを取ろうとする子でした。体に不自由があっても、一人で何か「出来る」という感覚に、希望を持てるからかもしれません。

歌のおかげで、バンドや観客の皆さんとつながることができ、輝ける場所を提供してもらえました。このまちで多くの

歌を力に新しい挑戦を

に受け入れてもらうことは、自分の居場所と生き甲斐を確かなものにできるという安心感になります。だからRPBの皆さんからの、時に厳しい歌唱指導は「挑戦すれば出来る」という彼女の心の成長にもつながり、ありがたいの一言です。

さまざまな立場や困難を超えて、聴く人の心に響く歌を歌うことが、景都から地域への恩返し。そして、歌を力にいろいろなことに挑戦する姿を見守ることが、親としての望みです。



バリアフリーてけてけ隊の活動内容は、QRコードからフェイスブックで。



多様な「普通」を知る

ネイバー（隣の人）からヘルパー、そしてパートナーへ。「視点の多様性」^{ダイバーシティ}が先入観を覆し、個々の価値観が認められる。

多様な立場の人々が共生するた

めには、地域社会に「在る」ことが前提になるが、日本では難病などの「違い」が、地域社会から隔離・排除されてきた。互いの存在を確かめる機会すら、無視されてきた過去だ。周囲が当事者と出会い、関心を持たなければ、問題は可視化されずに、歴史は常識として固着してしまう。

世界も問題を危惧し、生きにくさを持つ人がいる社会こそが「普通」であり、視点の転換が必要だと訴える。昭和54年に国連総会で決議された国際障害者行動計画では、「ある社会がその構成員のいくらかの人々を閉め出すような場合、それは弱くもろい社会なのである」と提唱された。

私は「遠位型ミオパチー」^{えんいがた}という希少難病を患い、首から下の体を動かせません。加藤さんに気兼ねなく支援を相談できるのは「もし自分だったら」と想像してくれるからです。もちろん安全に配慮した上での対応ですが、頼み辛いことを察してくれる彼女は、正直な気持ちを言いやすい雰囲気を作ってくれます。

私にとっては、病気がもたらす困難よりも、社会の壁「生きにくさ」の方がよっぽど障害です。業務の遂行や

voice

自分らしさを諦めない理由

権利の行使という手続きではなく、人と人として温度を感じる彼女との関係は、壁を低くしてくれるのです。

しかし、待っている壁への理解は深まりません。私の存在を地域に知ってもらうには、私自身が社会に出て行くことも必要。普段から会っていれば、配慮の必要性に関わらず、お互いがつながらんと思うからです。心のバリアフリーを率先してくれる加藤さんがいるから、自分らしさを諦めないのかもしれないかもしれません。



はらだ きみえ
原田 君江さん(道悦四)
静岡県中部難病ケア市民ネットワーク代表

人間の命の営みの礎は、自ら居場所や生き甲斐を見つけて、人生の質「QOL」^{クオリティオブライフ}を向上させたいと一歩を踏み出す探求心。自ら選択・決断・行動できることが「生きる証」であり、周囲と主体的に関わることで、それを具現化できる。だからこそ、それらを制限される難病患者にとって、支援者が理解者であることは、何よりも自己実現の原動力となる。

対等な人間関係を築くことは、病気の有無に関わらず難しい。ならば、出来ないことを悲観するよりも、出来ることを見つけた方が、生きやすいはずだ。誰もが役割を担い、尊重し合える関係が無ければ、「弱くもろい社会」への歯止めは利かない。



(左上)夢コープ中部事業所。(左)原田さんが社会的弱者のQOL向上を目指し進める「バリアフリーてけてけ隊」のステッカー。(上)福祉への理解と宮川町住民との交流を深める「夢コープ感謝祭」。





PROFILE

かとう ひさえ
加藤 久恵さん (中溝町)
居宅介護ヘルパー。同行
援護や移動支援も行う。
NPO 法人ワーカーズコー
プ「夢コープ」 中部事業所
に所属。

相棒
partner

Hisae Kato

互いが対等で頼れる相棒

interview

居宅介護ヘルパーは、利用者さん宅を訪れる前に、介助を安全に行うための「手順書」を受け取ります。しかし私は、現場の状況からより自然な動きでストレスを軽減できそうな場合は、その案を利用者さんに提案してみます。それに初めて賛成してくれたのが、君江さんでした。

利用者さんも、ヘルパーに遠慮することが沢山あって、ヘルパー自身も、規制に縛られてサービスが形骸化してしまうこともある。せつかく人と人との出会いの、それでは関係に血が通わないと、彼女が気付かせてくれたんです。

ヘルパーからすると、訪問が1日5件ならば1対5の関係。でも、利用者さんにしてみれば1対1。今日会える1人だけのヘルパーという存在なんですよね。多忙でも全力で向き合うことで得る「ありがとう」は、逆に私を元気にしてくれます。

病気や障害は、何も出来ないというレッテルではないはず。君江さんは、私よりもパソコンに詳しいとか、物の見方や捉え方を変えるだけで、新しい発見と一緒に体験できる。互いを頼もしく思う気持ちは、ヘルパーと利用者という関係を「パートナー」に変えてくれました。相棒が地域に増えれば、誰もが暮らしやすいなと思うのです。

背景

Background

Jumeno Vito



PROFILE

仁藤 夢乃さん

(一社)Colabo 代表。困難を抱える少女たちのため、夜間巡回や食事提供、緊急時の宿泊支援事業などに取り組んでいる。



背景にある関係性の貧困

interview

私は10代の頃、渋谷の街を彷徨う「高校生難民」でした。当時、私に近づいてきた大人は、買春者か風俗の斡旋人^{あつかい}だけでした。それから10年経った今も、居場所を無くした多くの少女が、危険に直面しています。

児童買春の被害に遭った子の多くが「性を買った」という罪悪感を抱いています。私が会って聞き取った実態は、彼女たちが性的搾取^{せつしゆ}の被害者だということです。そこで、売春に至るまでの背景を知って欲しいという思いから、全国の当事者の体験を写真や手記で発信する、「私たちは『買われた』展を企画しました。

ネット上には「売る方が悪い」などという中傷の声もありました。世間が抱く、売春のイメージを象徴した反応です。しかし、食事や学費、時には上履きやノートを買うため、少女たちに選択肢はありませんでした。それは経済面だけでなく、家庭や学校、信頼できる大人とつながれない「関係性の貧困」が原因なのです。

日本の社会に溢れる「援助交際」「JKビジネス」など、買う側に都合の良い言葉。でも、その真意は暴力と支配です。お金を受け取る子ども^{こども}の自己責任にして、自分を正当化している大人が沢山いる。企画展を通して、少女たちの現実に温かい目を向ける人が増えればと思います。



「若年妊娠」や性知識の現状
については、QRコードから広
報しまだ平成28年11月号で。



「普通」化する先入観

居場所を失った少女に優しく映るのは、
夜の「社会保障」。家出は非行と片付け
て周囲が目を逸らせば、漂着してしまう。



(上) 少女たちが大人に言われて嫌だ
った言葉を寄せ書きにした作品。(右) 同
じ境遇の少年でさえ、生きるためには
搾取の対象として少女に近づいてくる。



先進国であるはずの、日本の子ど
もの貧困率は13・9%。実に7
人に1人が、平均的な所得の半分(年
間122万円)を下回る家庭で暮ら
している。そこにあるのは、失業・病
気・事故・離婚・介護・災害…誰もが、
不意に貧困状態に陥る恐れがある社
会で生きている。個人の努力不足で
は片付けられない現状が、このまぢ
にも存在する。

複合的な問題を抱え、混乱した生
活の中で生き延びるために必死な子
どもは、自主的に助けを求めづらい。
家出や売春の渦中にいる少女が公的
支援を受けるには、さらなる壁が立
ちはだかる。「非行少女」として保護
されれば、逃れてきた環境に引き戻

されてしまうか、問題児として福祉
や教育だけでなく、医療からも切り
捨てられてしまうからだ。

「自己責任」という当事者側に排除
する理由があるほど、社会は差別の
正当性を誇示する。児童買春が少女
売春として報道されれば、買う側の
責任転嫁を隠し、売る側が悪いとい
う先入感が常態化する。「買われた」
背景に、目を向けない世間。大人を
信頼することを諦めた彼女たちは、
夜の街で居場所を探してしまう。

社会保障は、自立のための「制度」
ではなく、人々をつなぐ「関係性」だ。
地域が問題を直視し、本質を想像で
きなければ、子どもたちの声なき声
は聞こえてこない。

voice



杉村 佳代子 さん
(一社)てのひら副代表

私たちが、COOPと共に「私
たちは『買われた』展」を静岡で
開いた理由、それは児童買春の
問題が、大都市だけで起こって
いる他人事ではないからです。

売春や性的搾取の背景には、
貧困や虐待などがあるにも関わ
らず、日本では未だに個人の問
題として終始しがちです。大人
が起因する社会の歪みだと認め

まずは想像してほしい

たくないから、多くの人が無視
しているのかもしれませんが。

今回の企画展では、少女たち
が問題とともに、辛くも生き抜
いてきた証を、知られる勇気を
持って可視化してくれました。
理解しがたい告白だとしても、
まずは想像してほしい。大人が
何もしなければ、児童買春や性
被害は増える一方でしょう。

人は、関心を持てば変わる
はず。少女たちが、安心で
きる関係を築ける「人」と出会え
ることを、望んでやみません。



重度障がいを持つ子どもと親の会「リアンの会」では、育児の様子を伝える講演会だけでなく、命の可能性を訴えるための学校訪問やイベント企画なども行っている。

機会が広げる「普通」

情報不足は無関心につながり、やがて不安や偏見を生む。関わる機会と経験が「社会的少数派^{マイノリティー}」という枠を取り払う。

感じ方を共有するために

8月に開催した「福祉のつどい」のボランティア募集があった際、社会福祉協議会から、交流会の企画と進行に挑戦してみないかと、声を掛けられました。障害への理解が深まればと、引き受けました。

企画で心掛けたのは、感覚だけでなく、簡単に参加でき、みんなで作り上げ、自分も楽しめることでした。当日は、花びらに見立てた紙に手形や野菜でスタンプを押し、カラフルな一輪の花が無事に完成。障害や世代に関係なく、みんなが一つのことに関心になる時間に溢れていたのは、笑顔と幸せな気持ちでした。

障害を持つ人と持たない人が、同じ視点に立って生きていくためには、お互いの生活を知り、それぞれの感じ方を共有することが必要です。私たちも実際の触れ合いから、相手の目線に合わせることで「障害者はいかにかわいそう」という一方的な見方が変わることを経験しました。

自分にとっての常識は、他の人の非常識かもしれないことを、特に健全者は忘れがち。だからこそ障害の有無に関わらず、人と人が触れ合う機会が増えるほどに、先入感や薄れて相手の常識を受け入れやすくなるはず。心のバリアフリーが広がるまちは、全ての人にとって優しい環境だと思います。

interview



そぎ かなで すがわら ゆづき
曾木 楓さん(左)、菅原 優月さん(右)
「福祉のつどい」の交流会を企画進行。
金谷高校1年生。ボランティア部に所属。

経験
experience

Suzuki
& Raede



(上) 島田市社会福祉協議会が開催した「福祉のつどい」の参加者。(右・中) 紙の花びらを手形や野菜で自由に彩る子どもたち。(左) 世代や立場を超えた参加者同士の触れ合い。



平成25年、障害者自立支援法に代わる障害者総合支援法が施行され、身体障害者手帳を持たない難病患者に対しても、障害福祉サービスの提供が始まった。そして、来年4月に施行される同法の改正では、対象者への生活支援と就労支援が拡充され、サービスの質の向上を図る環境整備が行われる。

円滑に社会を営むために、人間は誰しもが対等な構成員としての役割と責任を担う。一方で、障害者の社会参加の方法は、自立や就労だけではないはずだ。感性や能力に合った役割が見つければ、それが「仕事」となり地域とつながる。健常者の常識だけが全てではない、そう教えてくれる才能。障害者の歩幅や目線ではなく、気付き得ない幸せもある。

年齢・性別・国籍・嗜好。一人一人が違うから、会ってみなければ分かり合えない。相手に関する情報不足は無関心につながり、やがて不安や偏見を生んでしまう。障害の有無も例外ではない。人は、未知の存在に対して不安を感じる。しかし実際に出会い、自らの無知を自覚できれば、それは安心に変わる。

全ての当事者も、このまちに生きる「生活者」であり、知らないことを知ることから、相互理解は始まる。地域に必要なのは、障害にではなく、自分には無い部分に注目する視点。関わる機会と経験が、個性に対する受容力を高める。

voice



かなさき けいこ
金崎 啓子 養護教諭
金谷高ボランティア部顧問

隣接する金谷小に障害児放課後児童クラブが創設されたのを機に、ボランティア部の活動が始まりました。以来、活動範囲は校外にも広がっています。

社会的弱者に対する先入観や偏見を払拭するには、「違い」に慣れることが必要です。生徒にとって高校生活は、社会に出る

心のバリアを張らない

前に人間の多様性に順応する、最後の機会でもあります。

生徒が「何かお困りですか」と自然に声を掛ける姿を見ると、頼もしく思えます。相手が誰であれ、心のバリアを張らなければ、障害や病気は違いではなく「個性」になり、人間の本質の部分で向き合えるはずですから。

奉仕はいずれ、感謝される喜びとして、自分に返ってきます。生徒には、部活動を通して自己有用感や肯定感を持ち、「ありがとう」の価値が分かる大人に成長してほしいですね。



才能
ability

Keito Tsukamoto

「普通」の軸をずらす

全ての人々が孤独・孤立・排除・摩擦から擁護されるならば、個々が持つ才能は開花して、地域社会は「自分色」で彩られる。

依 依存症やストレスなどの「心身の不適応」、路上死や外国人雇用などの「社会的排除」、貧困や虐待などの「社会的孤立」。昨今の生きにくさは見えにくく、問題を複合的に抱える人も、関わりや支援を模索している。要支援者が地域で直面する、不適応・排除・孤立という壁。弱さを

毎 週月曜日、執務室のテーブルに活けられる花束。塚本景都さんが持参してくれるが、花瓶を持つての車イス移動は難しい。彼女を迎えたからこそ、花が醸し出す安息感に気付かされた。だから水の交換は、職場の仲間が自然に手伝う。

市では、非常勤を含め 19 人の障害のある人を任用しています。市民意識の向上などに伴い、障害者の雇用機会を創出する重要性が、一層高まっています。

塚本さんには、いろいろな部署の作業を補助してもらっています。われわれ雇用者側では、執務環境や仕事の用意、指導者の育成など、配慮が必要なことは確

認め合う職場づくりのきっかけに

かです。また、配置先の危機管理課では、周囲の職員が作業の手助けなどを行うこともあります。

一方、島田市職員に求められるのは、第一に「人柄」、次に「やる気」「能力」です。それは、障害の有無に関係ありません。一番重要な彼女の人柄が、関わる職員に「一緒に仕事をしたい、教えてあげたい」と思わせているのかもしれないですね。

全ての職員は完全ではなく、互いの長所を持ち寄り、短所を補い合って島田市役所としての仕事を作り上げています。彼女との出会いが、多くの職員にそれを再認識させるきっかけになればと考えています。



ながた ともゆき
永田 智行 課長補佐
人事課 任用・給与担当

voice



みんなが水を与えてくれるから
きっと咲き続けることができる



KEITO & RPB “こころ
の花”。塚本景都さんの
歌声は、QR コードから
YouTube で。



弱さとして認められない社会は、あまりにも生きにくい。

幸せの価値は、人生を自分らしく送れるという希望の大きさと等しい。違いを同質化するのではなく、互いの個性を受容することで、誰もが「あるがまま」に生きやすくなる。多様性の少数派として生きる側ではなく、迎える側が意識を変えなければならぬのだ。共生社会の実現に向けて、当事者への「配慮」を「自然」と同義語にする意識改革が、このまちにも求められている。

世の中を形作るのは、あなたと私「YOU & I」だけ。その隙間に「優と愛」があれば、互いを認める機会と、人々や地域とつながる関心が生まれる。「普通」という言葉を持つ尺度は、相手の「視線」を想像することで変わる。何も特別なことではない、全員が特別な存在であるだけだ。

職

場に飾られた花束が咲かせた彼女の自信と、「ありがとう」という仲間の笑顔。困難を抱えて社会へ羽ばたいた勇気は、同じ境遇にある人へと渡されるバトンになる。

取り取りの花：明るい色、暗い色、鮮やかな色、鈍い色。優劣ではなく、互いを引き立てるために依存し合い、共存している。地域も花束と同じ。いろんな色を受け入れることで、このまちは彩られていく。